

# 令和5年度 第3回学校運営協議会

令和6年1月26日(金)

場所：会議室

司会：内池 書記：杵田

## 【参加者 14名】

山田 亨、乾 敏美、本房 達哉、本田 かおり、田井中 直美  
宮内 順、内池 憲治、北井 法由、松下 真二、宮前 侑介、冢瀬 克徳、  
丸岡 大輔、細見 太郎、杵田 ゆうき

※敬称略

1. 校長挨拶
2. 会長挨拶
3. 協議項目

### (1) 令和5年度学校評価(案)について

○自己診断への保護者の回答率が低い。

紙媒体で実施していないことが原因ではないか。回答率を上げる工夫をした方が良い。

→回答率が上がる方法を考える。(学)

○教職員間で授業力や教科指導力について研究する機会を設けているという項目の減少の原因は何か。教職員数の削減により、教員1人あたりの業務負担が大きくなってしまったことが原因の1つではないか。抜本的な業務の見直しが必要と考える。(学)

→授業アンケートを受けて教科で話し合う時間を確保するよう努める。(学)

○探究の評価の仕方はどう変化したのか。

現行では成果物を作成するのみであるため、探究委員会で、ルーブリック評価を作成中している。

(ルーブリックとは、学習の到達度表を用いて測定する評価方法である。)

ルーブリックを探究の授業開きの際に生徒にも示すことで、どんな能力を身につけるのかを意識できる。

→ルーブリックは妥当だと思われる。小・中学校では、どのような評価をしていたかということを生徒にも聞いてみるのもいいのではないか。実際に中学校では通知書に文章で記載している。(委)

○家庭学習を指導するのは難しいのでは。保護者は生徒の学習している姿を見る機会は少ないのでは。

→実情では、家で勉強させることは難しい。塾の自習室で勉強させている。家では課題しかしていない。自主的に受験勉強をさせることは難しい。(委)

○自己診断の項目の「学校はICT機器を効果的に活用している」という主語を変更すべきではないか。教員は学校がどれほど使用しているか、把握していると思うが、生徒には見えていないのではないか。

→主語を「私は(生徒自身)/教員は」という文言に変更することも検討する。(学)

○遅刻者数は数値としてあげなくていいのではないか。項目ごと削除してはどうか。

遅刻は怠惰だけが原因ではない。身体の状態などによって仕方がないこともある。

その区別を分けて算出できるのか。→理由は確認できるが、見極めが難しい。(学)

→全体で数を計上するのではなく、在籍者数に対する割合などを出すよう工夫する。(学)

(2) 令和6年度学校評価(案)について

○中期目標である「進路希望を実現するために努力しているか」という項目について

・生徒の学年によって差がでるのではないか。

→高校卒業後のビジョンや、受験意識を持っているかどうかという観点ならば全学年を対象にしてもいい。受験勉強については、1年生時に保護者向けの進路講演会で親として、大学受験と高校受験との違いを知るいい機会となったが、親と子の意識の差も出てきた。1年生から受験意識を持つことは難しいのが現状ではないか。3年生になると追い込まれて勉強するようになる。(委)

・自分でやっていると思う線引きは人それぞれであるので、差が出てくるのではないか。(委)

→自己分析ではなく、動画視聴をどれほど行ったか、学習ツールの利用時間などで測ってはどうか。

(委)

(3) 学校教育自己診断について

○自己診断の項目が多いのではないか。

保護者も教員も多忙であるため、項目を精査して本当に意味のある項目のみ残してはどうか。(委)

(4) 42期進路状況中間報告について

○出願の状況が変化している。交通の便なども関係しているか。(学)

4. 校長謝辞

以上